



設定

村に移住したボディビルダー父子が村の儀式と称した不思議な液体による洗礼「浄化」を受け、調教、洗脳され、人間オナホールとして販売されてしまった「村の特産品」の番外編です。

番外編では「村の特産品」に登場した警察官の青年を主人公としてストーリーが展開されていきます。警察官の青年の苦悩をお楽しみください、、、。

登場人物

井上聡 28 歳

「村の特産品」に登場した警察官の青年。純朴で正義感が強い。以前の職場で佐久間になついていた。

佐久間新 30 歳

聡の先輩。以前の職場で聡と同僚だった。また、聡が今回駐在予定の村に先に駐在していた人物。冷静で物腰柔らかく、するどい観察眼を持つ。

田中茂 40 歳

二人の元上司。不正を見破った佐久間に告発され、懲戒処分を受けたことがある。

再会

村のバス停の脇に、その小さな駐在所がぼつんと建っている。駐在所の前の舗装の甘い道の先には、畑と雑木林が広がり、風が吹くたびに草の匂いが運ばれてくる。

聡は、その景色を眺めながら大きく息を吸い込んだ。都会の交番では嗅いだことのない、土と植物の匂いだった。

「井上！」

聞き慣れた声に振り向くと、駐在所の軒先に一人の男が立っていた。制服姿が凛々しく、笑顔が爽やかな佐久間先輩だった。

「佐久間先輩！」

聡は思わず背筋を伸ばし、声を弾ませた。以前の職場で、何かと世話になった先輩。自分が失敗するたび、叱るでもなく、静かにフォローしてくれた存在だ。それでいて上司でも納得いかないことがあれば冷静に意見していく、そんなところを尊敬していた。何度も仕事の悩みを聞いてもらって、何度も一緒に飲みに行った。

「久しぶりだな。元気そうで何より。」

佐久間は穏やかに笑い、聡の荷物にちらりと目をやった。その視線は一瞬で

状況を把握するかのように鋭くなっていたが、すぐに柔らかさを取り戻す。まるで事件の容疑者を見る時のような目だ。変わっていない、、、。

「長旅だったろ。ここはバスの本数も少ないから、待ち時間も多かったろ。」

「はい、、思った以上に静かで、ちょっと驚きました。」

正直な感想を口にする、佐久間は小さく息を吐いた。

「最初はみんなそう言う。この村はな、何もないようで……いろいろある。」「いろいろ、ですか？」

聡が首をかしげると、佐久間はそれ以上は説明せず、代わりに駐在所の戸を開けた。

「まあ、追々分かる。仕事しながらな。それより俺の代わりがお前とは心強いよ。」

その言葉に、聡の胸が少し熱くなる。しかしそう言った佐久間の目はどこか悲しげだった。

「僕もです。ただ先輩が警察辞めちゃうのは寂しいですね。もっと一緒に働きたかったです。先輩の代わりにここでも頑張ります！」

純朴なその言葉を聞き、佐久間は一瞬、じっと聡を見つめた。まるで何かを

量るような視線だったが、すぐにいつもの物腰柔らかな表情に戻る。

「、、ああ。無理はするな。ここは、正義感だけじゃ立ち行かない場面もあるから、、。」

聡はその意味を深く考えないまま、力強くうなずいた。

風が吹き、遠くで村特有の植物が、二人の再会を祝福するようにざわめいている。佐久間はその音に、ほんのわずかに眉を動かしたが、聡は気づかなかった、、、、。

洗礼

佐久間から仕事の引継ぎを受け、ヘトヘトになっている聡。

佐久間と再会を祝して飲みにも行きたかったが、佐久間は何かと忙しいらしく断られてしまった。

「先輩と飲みてえよ、、、。」

独り言を言いながら、とぼとぼと用意された自分の家に帰っている。

空き家が多いのだろうか、ほとんどの家の明かりが消え、真っ暗になっている道の先、暗闇の中に一点の明かりが見える。その明かりはまるで聡を誘っているように温かい光を放っている。

「あれは確か、、立ち入り禁止の、、。」

警察官でも村での儀式を済ませた後でないと外のものは近づいてはいけないと佐久間が話していた場所。そこに、佐久間が入っていくのが見えた。

「あれ、先輩、、あんなところで何の用事だろ、、。さてはこっそり宴会かあ？先輩め、現場を押さえて問い詰めてやる。井上巡查部長をなめるなよお。」

聡はなぜか猛烈にテンションがあがり、その建物にゆっくりと近づいていく。まるで犯罪組織に侵入するような気分を味わいながら、慎重に近づいて行った。

トントンッ。プシュウウウウウウー！

ぐうあああああ、、、目が、、、、く、、、。

一瞬何が起こったか分からなかった。誰かに肩を叩かれ振り向くといきなり
催涙スプレーらしきものをふきかけられたのだ。目を抑え苦しむ聡にその男は
何かを嗅がせ、聡を気絶させてしまう、、。

「う、、、ここは、、、、。」

まだ痛みのある目をゆっくりと開けると見慣れない場所で、聡は大の字につ
るされ、固定されている。

「なんだよ、、これ、、、、こんな普通の村で、、こんな、、。」

「まったく、警察官のくせにルールも守れないのか。順番がくるってしまったじ
ゃないか、、。」

聡が声のする方に目をやると、それは昼間に話をした村長だった。昼間に話
した時とは印象が違い、とても意地悪そうな笑い方をしている。

村長はこの村では外界のものが入村したときは必ずその「穢れ」を浄化する
儀式を受けなければならないこと、そしてこの立ち入り禁止の場所がその儀式
が行われる場所であることなどを淡々と説明した。